

## (54) SINGLE PERFUME AND FRAGRANT COMPOSITION CONTAINING THE SAME

- (11) 5-239491 (A) (43) 17.9.1993 (19) JP  
 (21) Appl. No. 4-43461 (22) 28.2.1992  
 (71) NIPPON FINE CHEM CO LTD (72) MITSUAKI TANAKA(1)  
 (51) Int. Cl<sup>5</sup>. C11B9/00, A61K7/46

**PURPOSE:** To provide a single perfume which can retain a constant aroma titer independently of the forms of preparations and uses and a fragrant composition which contains the perfume.

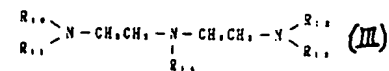
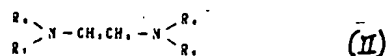
**CONSTITUTION:** This single perfume contains the whole or part of the perfume in the form of a precursor undergoing decomposition by the action of an enzyme or acid to form the perfume and also contains an enzyme or acid capable of decomposing the precursor; and a fragrant composition containing the perfume.

## (54) LIQUID DETERGENT COMPOSITION FOR HEAD SURFACE

- (11) 5-239492 (A) (43) 17.9.1993 (19) JP  
 (21) Appl. No. 4-44518 (22) 2.3.1992  
 (71) KAO CORP. (72) KAZUKUNI TSUKUDA(3)  
 (51) Int. Cl<sup>5</sup>. C11D1/68, C11D3/28, C11D3/30

**PURPOSE:** To prepare the subject composition improved in finish by mixing a surfactant, a volatile or liquid amine compound and water.

**CONSTITUTION:** 0.01-20wt.% surfactant is mixed with 0.01-20wt.% volatile or liquid amine compound of formula I, II, III or IV (wherein  $R_3$ ,  $R_6$ ,  $R_8$ ,  $R_{10}$ ,  $R_{12}$ ,  $R_{14}$  and  $R_{15}$  are each H or 1-4C alkyl; and  $R_4$ ,  $R_5$ ,  $R_7$ ,  $R_9$ ,  $R_{11}$  and  $R_{13}$  are each H, 1-4C alkyl or 2-3C hydroxyalkyl) and water to give the objective detergent composition which will largely or wholly give a hexagonal or lamella liquid crystal or its gel when the water and other volatile components therein evaporate and, as a result, the water content is lowered to 10wt.% or below.

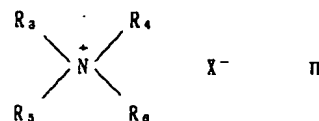


## (54) LIQUID DETERGENT COMPOSITION FOR CLOTHES

- (11) 5-239493 (A) (43) 17.9.1993 (19) JP  
 (21) Appl. No. 4-43368 (22) 28.2.1992  
 (71) KAO CORP (72) HIDEJI TAGATA(3)  
 (51) Int. Cl<sup>5</sup>. C11D1/86, C11D1/68, C11D1/62, C11D3/37, C11D1/22, C11D1/29

**PURPOSE:** To prepare the subject composition improved in detergency by mixing a specified alkyl glycoside, cationic surfactant, aminated silicone (derivative) and anionic surfactant.

**CONSTITUTION:** 5-70wt.% alkyl glycoside of formula I (wherein  $R_1$  is linear or branched 8-18C alkyl (phenyl) or alkenyl;  $R_2$  is 2-4C alkylene; G is a residue of a 5-6C reducing sugar; (x) is 0 to 5 on average; and (y) is 1 to 10 on average) is mixed with 0.5-10wt.% cationic surfactant of formula II (wherein at least one of  $R_3$  to  $R_6$  is 14-20C alkyl, and the rest are each 1-5C (hydroxy) alkyl or  $(CH_2CH_2O)_mH$ ; (m) is such a number that the average number of ethylene oxide molecules added is 2 to 30 in the molecule; and x is halogen,  $CH_3SO_3$ , or  $CH_3CH_2SO_3$ ), 0.05-5wt.% aminated silicon (derivative) having a molecular weight of 2,000 to 15,000 and 0.5-10wt.% of at least one anionic surfactant selected from alkylbenzene sulfates, etc.



(19)日本国特許庁(JP)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平5-239491

(43)公開日 平成5年(1993)9月17日

(51)Int.Cl. <sup>5</sup>	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
C 1 1 B 9/00		A 2115-4H		
A 6 1 K 7/46	3 0 1	9051-4C		
C 1 1 B 9/00		Z 2115-4H		

審査請求 未請求 請求項の数4(全11頁)

(21)出願番号	特願平4-43461	(71)出願人	000231497 日本精化株式会社 大阪府大阪市中央区備後町2丁目4番9号
(22)出願日	平成4年(1992)2月28日	(72)発明者	田中 光昭 兵庫県神戸市灘区赤松町3丁目3番10-205号
		(72)発明者	忽那 国彦 兵庫県宝塚市美座2丁目18番28号
		(74)代理人	弁理士 三枝 英二 (外4名)

(54)【発明の名称】 単品香料及び該単品香料を含有する芳香性組成物

(57)【要約】

【目的】 製剤形態や用途に関係なく一定した香気力価を長期に亘り持続できる単品香料及び該単品香料を含有する芳香性組成物を提供することにある。

【構成】 単品香料において、該香料の全量乃至一部を、酵素又は酸の作用により分解して該香料となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酵素又は酸を配合したことを特徴とする単品香料及び該単品香料を含有する芳香性組成物。

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 単品香料において、該香料の全量乃至一部を、酵素の作用により分解して該香料となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酵素を配合したことを特徴とする単品香料。

【請求項2】 単品香料において、該香料の全量乃至一部を、酸の作用により分解して該香料となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酸を配合したことを特徴とする単品香料。

【請求項3】 単品香料において、該香料の全量乃至一部を、酵素の作用により分解して該香料となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酵素を配合したことを特徴とする単品香料を含有する芳香性組成物。

【請求項4】 単品香料において、該香料の全量乃至一部を、酸の作用により分解して該香料となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酸を配合したことを特徴とする単品香料を含有する芳香性組成物。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、単品香料の改良及び改良された該単品香料を含有する芳香性組成物に関する。

## 【0002】

【従来の技術】一般に、香料は、揮発度の異なる香料を調合して、調合香料として使用されている。しかしながら、最近、単一の香料を用いる単品香料が注目を浴びている。

【0003】その場合、単一の香料を含む単品香料においては、匂いの強さ（香気力価）を得るために、一般には揮発性の強いものを用いる必要があるが、揮発性の強い香料は持続性に欠け、香気力価は時間の経過と共に著しく変化してしまい、所定の芳香を一定して長期間持続させることはできないという問題点がある。

## 【0004】

【発明が解決しようとする課題】本発明の目的は、製剤形態や用途に関係なく一定した香気力価を長期に亘り持続できる単品香料、及び該単品香料を含有する芳香性組成物を提供することにある。

## 【0005】

【課題を解決するための手段】即ち、本発明は、単品香料において、該香料の全量乃至一部を、酵素又は酸の作用により分解して該香料となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酵素又は酸を配合したことを特徴とする単品香料及び該単品香料を含有する芳香性組成物に係るものである。

【0006】即ち、「本発明単品香料」とは、単品香料の全量乃至一部を、酵素又は酸の作用により分解して該香料となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酵素又は酸とを配合されたことを特徴

とする。

【0007】「酵素又は酸を配合する」とは、該前駆体物質を含む香料と、混合して存在すること、及び別々に存在して使用時に両者が接触できる状態で組み合わせることを含む。

【0008】本発明者の研究によれば、上記の通り単品香料において、該香料の全量乃至一部を前駆体物質の形態で配合し、これを酵素又は酸と共に使用したときは、該前駆体物質と酵素又は酸との緩やかな反応の進行に伴って香料成分が徐々に揮散し、一定の香気力価を長期間持続させ得ることが見出された。

【0009】単品香料として考えられる香料としては、トップノート、ミドルノート及びベースノートのいずれかに属する香料が使用できるが、好ましくはトップノート又はミドルノートに属する香料が揮発性の面で好ましい。

【0010】上記トップノート、ミドルノート及びベースノートとは、香料を揮発度に従って分類したものであり、以下の内容で分類されている。

## 20 【0011】（1）トップノート

蒸気圧が高く、におい紙につけておくと2時間以内に揮散して、後に匂いが残らないもの。

## 【0012】（2）ミドルノート

中程度の蒸気圧を有し、におい紙につけておくと2～6時間においが持続する程度のもの。

## 【0013】（3）ベースノート

蒸気圧が低く保留性に富み、6時間以上におい紙に匂いが残るもの。

【0014】トップノートに属する香料としては、例えばリナロール、エチルアセテート、オクチルアルデヒド、ベンズアルデヒド、フェニルアセトアルデヒド、青葉アルコール、ギ酸フェニルエチル、樟脳、テルピネオール、d-リモネン、l-メントール（エルメントール）、3-オクテノール、テトラヒドロリナロール、ボルネオール、イソプレゴール、ベンジルアルコール、ジメチルベンジルカルビノール、メチルフェニルカルビノール、ジメチルフェニルカルビノール等が挙げられる。

【0015】またミドルノートに属する香料としては、例えばテルピネオール、グラニオール、シトロネロール、シトロネラル、デシルアルデヒド、ベンジルアセテート、シトラール、オイゲノール、フェニルエチルアセテート、シトロネリルアセテート、グラニルアセテート、テルピニルアセテート、アセトフェノン、チモール、イソオイゲノール、ボルニルアセテート、ベンジルプロピオネート、9-デセノール、ネロール、ロジノール、ジメチルオクタノール、ラバンジュロール、ムゴール、ミルセノール、テトラヒドロムゴール、β-フェニルエチルジメチルカルビノール、β-フェニルエチルメチルエチルカルビノール、フェノキシエチルアルコール等が挙げられる。

【0016】またベースノートに属する香料としては、例えばγ-ウンデカラクトン、エチルメチルフェニルグリシデート、ヘキシルシンナミックアルデヒド、フェニルエチルアルコール、ムスコン、シベトン、メチルヨノン、ヨノン、cis-ジャスモン、バニリン、シンナミックアルコール、サイクラメンアルデヒド、ファルネソール、ヒドロキシシトロネロール、ボルニルメトキシシクロヘキサノール、ノボル、ネロリドール、サンタロール、サンダロール、セドロール、ベチペロール、パチュリアルアルコール、インドール、スカトール、アニスアルコール、γ-フェニルプロピルアルコール、α-アミルシンナミックアルコール、フェニルグリコール、第3級ブチルシクロヘキサノール、安息香酸、桂皮酸、ヒドログル酸、フェニル酢酸、2-メチルテトラヒドロキノリン、6-メチルキノリン等が挙げられる。

【0017】本発明においては、上記単品香料において、該香料の全量乃至一部を、酵素又は酸により分解して香料成分を生成する前駆体の形態として、酵素又は酸と共に配合する。

【0018】本発明における前駆体物質としては、酵素又は酸により分解し香料成分を生じるものであれば特に制限されず、酵素の場合、公知の香料の配糖体、グリセライド、アミノ酸若しくはペプチドの誘導体等を広く使用でき、酸の場合は酵素の場合に加えて、更に公知の香料の環状アセタール化合物等を広く使用することができる。これら前駆体物質は公知の物質であるか又は公知の方法によって容易に製造される。

【0019】上記配糖体としては、例えばアルコール系香料の配糖体等が使用でき、アルコール系香料を式R-OHとすると一般式：



(式中、Gはグリコシル残基を示す。)で表わすことができる。

【0020】上記一般式(1)中Gで示されるグリコシル残基としては公知の各種の単糖類、オリゴ糖類、多糖類等の糖類から得られるものを何れも使用できる。

【0021】上記単糖類としては、例えばグルコース、ガラクトース、マンノース、グルコサミン、ガラクトサミン、マンノサミン等の六炭糖類、アラビノース、キシロース、リボース等の五炭糖類等を例示することができる。

【0022】オリゴ糖類としては、例えばシュクロース、ラクトース、トレハロース、マルトース、セロビオース、イソマルトース、ゲンチオビオース、ラミナリビオース、キトビオース、キシロビオース、マンノビオース、ソホロース、マントトリオース、デンプン又はセルロース等の加水分解物等を例示することができる。

【0023】また、多糖類としては、例えばデンプン、セルロース等を例示することができる。

【0024】これらの中でもグルコース、ガラクトー

ス、マンノース、グルコサミン、マルトース、ラクトースが特に好ましい。

【0025】アルコール系香料としては、例えば青葉アルコール、3-オクテノール、9-デセノール、リナロール、グラニオール、ネロール、シトロネロール、ロジノール、ジメチルオクタノール、ヒドロキシシトロネロール、テトラヒドロリナロール、ラバンジュロール、ムゴール、ミルセノール、テルピネオール、1-メントール(エル-メントール)、ボルネオール、イソプレゴール、テトラヒドロムゴール、ボルニルメトキシシクロヘキサノール、ノボル、ファルネソール、ネロリドール、サンタロール、サンダロール、セドロール、ベチペロール、パチュリアルアルコール、ベンジルアルコール、β-フェニルエチルアルコール、γ-フェニルプロピルアルコール、シンナミックアルコール、アニスアルコール、α-アミルシンナミックアルコール、ジメチルベンジルカルビノール、メチルフェニルカルビノール、ジメチルフェニルカルビノール、β-フェニルエチルジメチルカルビノール、β-フェニルエチルメチルエチルカルビノール、フェノキシエチルアルコール、フェニルグリコール、第3級ブチルシクロヘキサノール等を例示することができる。

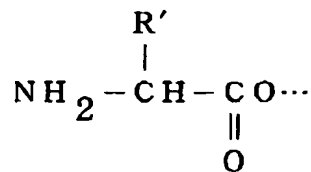
【0026】上記グリセライドとしては、例えばグリセリンとカルボン酸系香料とのモノグリセライド、ジグリセライド又はトリグリセライド等を使用することができる。

【0027】上記カルボン酸系香料としては、例えば安息香酸、桂皮酸、フェニル酢酸、ヒドログル酸等を例示することができる。

【0028】また、アミノ酸もしくはペプチドの誘導体としては、例えばアルコール系、カルボン酸系、アミン系香料等のアミノ酸もしくはペプチドの誘導体を使用することができ、アミノ酸又はペプチドを式：

【0029】

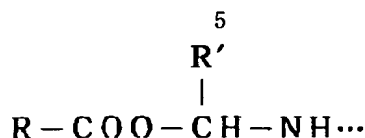
【化1】



【0030】で表わし、アルコール系香料、カルボン酸系香料及びアミン系香料をそれぞれ式：R-OH、R-COOH及びR-NH<sub>2</sub>で表わすとすると、次の一般式で表わすことができる。

【0031】

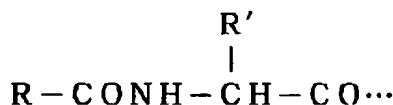
【化2】



【0032】、

【0033】

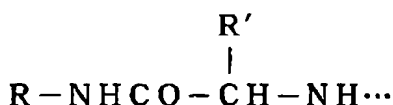
【化3】



【0034】及び

【0035】

【化4】



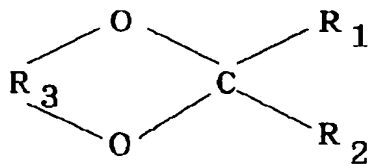
【0036】上記アミノ酸又はペプチドは公知のものを何れも使用できる。アミノ酸としては、例えばグリシン、アラニン、バリン、ロイシン、イソロイシン、セリン、トレオニン、システイン、シスチン、メチオニン、アスパラギン酸、グルタミン酸、リシン、アルギニン、チロシン、フェニルアラニン、ヒスチジン、トリプトファン、プロリン、オキシプロリン等を例示することができる。またこれらのアミノ酸が2個以上結合したペプチドも使用できる。

【0037】アルコール系及びカルボン酸系香料としては、前記と同じものを例示でき、アミン系香料としては、例えばインドール、スカトール、2-メチルテトラヒドロキノリン、6-メチルキノリン等を例示することができる。

【0038】上記環状アセタール化合物

【0039】

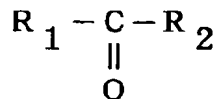
【化5】



【0040】は、例えばアルデヒド、ケトン等のカルボニル化合物系香料

【0041】

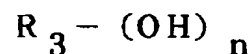
【化6】



【0042】と分子中に近接する複数の水酸基を有するポリオール化合物

【0043】

【化7】



【0044】(nは2以上)とを反応させることによって得られる。

【0045】上記アルデヒド系香料としては、n-ヘプチルアルデヒド、n-オクチルアルデヒド、n-ノニルアルデヒド、n-デシルアルデヒド、n-ウンデシルアルデヒド、ウンデシレンアルデヒド、ドデシルアルデヒド、メチルノニルアセトアルデヒド、n-トリデシルアルデヒド、n-テトラデシルアルデヒド、n-ヘキサデシルアルデヒド、ノナジエナール、シトラール、シトロネラール、ヒドロキシシトロネラール、ペリラルデヒド、ベンズアルデヒド、フェニルアセトアルデヒド、フェニルプロピルアルデヒド、シンナミックアルデヒド、α-アミルシンナミックアルデヒド、α-ヘキシルシンナミックアルデヒド、アニスアルデヒド、クミナルデヒド、ヘリオトロピン、ヘリオナール、サイクラメンアルデヒド、p-第3級ブチル-α-メチルヒドロシンナミックアルデヒド、サリチルアルデヒド、ヒドロトロパアルデヒド、バニリン、エチルバニリン、4-(4-ヒドロキシ-4-メチルペンテル)-3-シクロヘキセン-1-カルボキシアルデヒド、マイラックアルデヒド、シトロネニルオキシアセトアルデヒド等が挙げられる。

【0046】上記ケトン系香料としては、メチル-n-アミルケトン、エチル-n-アミルケトン、メチル-n-ヘキシルケトン、メチル-n-ノニルケトン、メチルヘプテノン、ジアセチル、1-カルボン(エル-カルボン)、d-カルボン、メントン、d-ブレゴン、ピペリトン、樟腦、メチルセドリロン、アセトフェノン、p-メチルアセトフェノン、p-メトキシアセトフェノン、ベンゾフェノン、ベンジリデンアセトン、メチルナフチルケトン、ヨノン、ダマスコン、ダマセノン、イロン、エチルマルトール、ヒドロキシフラノン、ネロン、ヒドロキシフェニルプタノン、アニシルアセトン、ジャスモン、ジヒドロジャスモン、ヌートカトン等が挙げられる。

【0047】上記ポリオール化合物としては、公知の各種の単糖類、オリゴ糖類、多糖類等の糖類、多価アルコール類等を挙げることができる。

【0048】上記単糖類としては、例えばグルコース、ガラクトース、マンノース、グルコサミン、ガラクトサミン、マンノサミン等の六炭糖類、アラビノース、キシロース、リボース等の五炭糖類等を例示することができる。

【0049】オリゴ糖類としては、例えばシュークロース、ラクトース、トレハロース、マルトース、セロビオース、イソマルトース、ゲンチオビオース、ラミナリビオース、キトビオース、キシロビオース、マンノビオース

ス、ソホロース、マントトリオース、デンプン又はセルロース等の加水分解物等を例示することができる。

【0050】また、多糖類としては、例えばデンプン、セルロース等を挙げることができる。

【0051】多価アルコール類としては、グリセリン、ソルビトール、ペンタエリスリトール、トリメチロールプロパン等を挙げることができる。

【0052】本発明は、単品香料において、該香料の全量乃至一部を、前駆体物質の形態で配合することを必須とする。また、必要に応じて複数の前駆体物質を組み合わせ

て配合することもできる。

【0053】上記前駆体物質は、香料成分として通常の処方と変わりなく種々の処方で用いられ得る。

【0054】一方、本発明において上記前駆体物質を分解するのに使用される酵素としては、配合された前駆体物質に作用し香料成分を生成させ得るものであれば特に限定されることはなく、前駆体物質と組み合わせ

て用いられる。本発明における酵素の代表的なものを下記に例示する。

【0055】配糖体に作用し香料成分と糖を生成させるもの：α-アミラーゼ、β-アミラーゼ、リゾチーム、α-グルコシダーゼ、β-グルコシダーゼ、α-ガラクトシダーゼ、β-ガラクトシダーゼ、α-マンノシダーゼ、β-マンノシダーゼ、β-フルクトフラノシダーゼ等グリセライドに作用し香料成分とグリセリンを生成させるもの：リパーゼ、アセチルコリンエステラーゼ、コリンエステラーゼ等アミノ酸もしくはペプチドの誘導体に作用し香料成分とアミノ酸又はペプチドを生成させるもの：アミノペプチダーゼ、カルボキシペプチダーゼ、ジペプチダーゼ、パパイ

ン、ペプシン、トリプシン、キモトリプシン等。

【0056】上記酵素の使用量としては、酵素反応を生起させる量以上であれば特に制限されないが、通常前駆体物質に対して0.01~20重量%程度、より好ましくは0.1~10重量%程度とするのがよい。

【0057】また、本発明において上記前駆体物質を分解するのに配合される酸としては、配合された前駆体物質に作用し香料成分を生成させ得るものであれば特に限定されることはなく、前駆体物質と組み合わせ

て用いられる。本発明における酸の代表的なものは、塩酸、硫酸、硝酸、ピロ硫酸、リン酸、塩素酸、ケイ酸、チオシアン酸、ヨウ素酸等の無機酸、アジピン酸、サリチル酸、安息香酸、リンゴ酸、酢酸、ギ酸、p-トルエン

スルホン酸、イソ吉草酸、クエン酸、シュウ酸、トリクロル酢酸、フルオロ酢酸、トリフルオロ酢酸、フマル酸、ブロム酢酸、トリブロム酢酸、ベンゼンスルホン酸、マ＊

青葉アルコールグルコシド  
水

上記組成の液剤を、室温で10分間攪拌混合して調製し

＊レイン酸、ヨード酢酸、フェニル酢酸、p-ニトロ安息香酸、p-アミノ安息香酸、p-メトキシ安息香酸等の有機酸を挙げることができる。

【0058】上記酸の使用量としては、酸との反応を生起させる量以上であれば特に制限されないが、通常前駆体物質に対して0.1~200重量%程度、より好ましくは1~100重量%程度とするのがよい。

【0059】本発明において、前駆体物質と酵素又は酸との組み合わせ或いは酵素又は酸の前駆体物質に対する量によって、緩やかに反応が進行し、香料成分を徐放

させることができる。

【0060】本発明単品香料は、前駆体物質と酵素又は酸とを分離した状態とし使用時に接触させて用いる二剤型として配合してもよいし、両者を一剤型として配合してもよい。

【0061】本発明は、上記の本発明単品香料を含有する芳香性組成物にも係るものである。本発明芳香性組成物は、上記本発明単品香料が配合され該香料に基づく芳香を発する各種の組成物を包含する。

【0062】具体的には、例えば香水、オーデコロン、シャンプー、リンス、石鹸、整髪料、洗口液、制汗剤等の化粧品、清涼飲料、菓子、冷菓、乳製品、酒類、肉、歯磨粉、タバコ等の食品、衣料用、台所用、住居用、風呂用等の芳香剤、浴用剤、洗剤等を挙げることができる。

【0063】より具体的には、次のような適用例を例示できる。

【0064】・本発明単品香料を構成する前駆体物質或いは香料及び前駆体物質を含む液剤、粉剤、ゲル剤又は錠剤である主剤と、酵素又は酸を含む液剤、粉剤、ゲル剤又は錠剤である副剤との組み合わせによる芳香剤、浴用剤、洗剤等。

【0065】・本発明単品香料を構成する前駆体物質或いは香料及び前駆体物質を含む液剤を、酵素又は酸を固定化した芯材又は揮散紙を通して揮発させる芳香剤。

【0066】本発明芳香性組成物において、本発明単品香料に加えられる添加剤は、この種の芳香性組成物に通常添加されるものであれば、特に限定されるものはない。

【0067】

【実施例】以下実施例及び比較例を示し、本発明の特徴とするところをより一層明確なものと

とする。

【0068】尚、以下において「%」とあるのは、「重量%」を意味する。

【0069】実施例1

26.2	%
適量	
100	%

た。

【0070】得られた液剤100gをボトルに入れ、芯材を介して、予め $\alpha$ -グルコシダーゼ1.0gを添加した揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記の基準で\*

青葉アルコール	10.0 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	10.0 %
エタノール	5.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の液剤を次のようにして調製した。

【0072】水を除く上記原料を室温で10分間攪拌混合し、その後水を加えて更に10分間混合溶解させた。

【0073】この芳香剤100gをボトルに入れ、芯材※

リナロール	5.0 %
リナロニルグルコシド	10.3 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	5.0 %
エタノール	5.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の液剤を次のようにして調製した。

【0075】水を除く上記原料を室温で10分間攪拌混合し、その後水を加えて更に10分間混合溶解させた。

【0076】得られた液剤100gをボトルに入れ、芯★

リナロール	10.0 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	10.0 %
エタノール	5.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の液剤を実施例2と同様にして調製した。

【0078】この芳香剤100gをボトルに入れ、芯材を介して、揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記☆30

ボルネオール	5.0 %
ボルニルガラクトシド	10.3 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	5.0 %
エタノール	5.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の液剤を次のようにして調製した。

【0080】水を除く上記原料を室温で10分間攪拌混合し、その後水を加えて更に10分間混合溶解させた。

【0081】得られた液剤100gをボトルに入れ、芯◆40

ボルネオール	10.0 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	10.0 %
エタノール	5.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の液剤を実施例3と同様にして調製した。

【0083】この芳香剤100gをボトルに入れ、芯材を介して、揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記

フェネチルグルコシド	23.3 %
寒天	1.5 %

\*官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0071】比較例1

※を介して、揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0074】実施例2

★材を介して、予め $\alpha$ -グルコシダーゼ1.0gを添加した揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0077】比較例2

☆の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0079】実施例3

◆材を介して、予め塩酸1.0gを添加した揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0082】比較例3

の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0084】実施例4

11

グリセリン	1.0 %
$\alpha$ -グルコシダーゼ	1.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の芳香剤を次のようにして調製した。

【0085】水、寒天、グリセリンを混合し、97℃で30分間攪拌溶解した。溶解後、60℃まで冷却し、フェニルエチルアルコールを加え、更に $\alpha$ -グルコシダーゼを添加後水を適量加えて100gに調整し、10分間混合\*

フェニルエチルアルコール	10.0 %
寒天	1.5 %
グリセリン	1.0 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	10.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の芳香剤を次のようにして調製した。

【0087】水、寒天、グリセリンを混合し、97℃で30分間攪拌溶解した。溶解後、60℃まで冷却し、フェニルエチルアルコール及びポリオキシエチレンノニルフェニルエーテルを加え、水を適量加えて100gに調整し、10分間混合※20

グラニオール	5.0 %
グラニオールグルコシド	10.3 %
寒天	1.5 %
グリセリン	1.0 %
$\alpha$ -アミラーゼ	1.0 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	5.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の芳香剤を次のようにして調製した。

【0089】水、寒天、グリセリンを混合し、97℃で30分間攪拌溶解した。溶解後、60℃まで冷却し、グラニオール、グラニオールグルコシド及びポリオキシエチレンノニルフェニルエーテルを加え、更に $\alpha$ -アミラ★

グラニオール	10.0 %
寒天	1.5 %
グリセリン	1.0 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	10.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の芳香剤を次のようにして調製した。

【0091】水、寒天、グリセリンを混合し、97℃で30分間攪拌溶解した。溶解後、60℃まで冷却し、グラニオール及びポリオキシエチレンノニルフェニルエーテルを加え、水を適量加えて100gに調整し、10分☆

青葉アルコール	15.0 %
青葉アルコールグルコシド	39.3 %
$\alpha$ -グルコシダーゼ	5.0 %
エタノール	10.0 %
イソパラフィン	適量
	100 %

12

\*した。混合後、ゲル状芳香剤用容器に充填し冷却固化し、揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表2に示す。

【0086】比較例4

※整し、10分間混合した。混合後、ゲル状芳香剤用容器に充填し冷却固化し、ゲル状芳香剤を調製し、揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表2に示す。

【0088】実施例5

★一ゼを添加後水を適量加えて100gに調整し、10分間混合した。混合後、ゲル状芳香剤用容器に充填し冷却固化し、揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表2に示す。

【0090】比較例5

☆間混合した。混合後、ゲル状芳香剤用容器に充填し冷却固化し、揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表2に示す。

【0092】実施例6



上記原料を室温で10分間攪拌混合して調製した。

【0093】混合した液剤10gを、直径約10cm、厚さ約0.5cmの不織布に含浸させ、芳香剤を調製した。

【0094】この芳香剤から揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表2に示す。

【0095】比較例6

\*

桂皮酸	5.0 %
桂皮酸モノグリセライド	7.5 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	5.0 %
エタノール	5.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の液剤を次のようにして調製した。

【0097】水を除く上記原料を室温で10分間攪拌混合し、その後水を加えて更に10分間混合溶解させた。

【0098】得られた液剤100gをボトルに入れ、芯※

桂皮酸	10.0 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	10.0 %
エタノール	5.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の液剤を実施例7と同様にして調製した。

【0100】この芳香剤100gをボトルに入れ、芯材を介して、揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記★

メチル-n-アミルケトン	5.0 %
1, 2, 5, 6-ジ-0-メチルヘキシリデン	
-d-グルコフラノース	12.1 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	5.0 %
エタノール	5.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の液剤を以下の様に調製した。

【0102】水を除く上記原料を室温で10分間攪拌混合し、その後水を加えて更に10分間混合溶解させた。

【0103】得られた液剤100gをボトルに入れ、芯☆

メチル-n-アミルケトン	10.0 %
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	10.0 %
エタノール	5.0 %
水	適量
	100 %

上記組成の液剤を実施例8と同様にして調製した。

【0105】この芳香剤100gをボトルに入れ、芯材を介して、揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記◆

\* 実施例6において、青葉アルコール15.0%及び青葉アルコールグルコシド39.3%に代えて青葉アルコール30.0%を使用し、 $\alpha$ -グルコシダーゼを使用しない以外は実施例6と同様にして、含浸された芳香剤を調製し、揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表2に示す。

【0096】実施例7

※材を介して、予めクエン酸1.0gを添加した揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表3に示す。

【0099】比較例7

★の基準で官能評価を行なった。その結果を表3に示す。

【0101】実施例8

☆材を介して、予め安息香酸1.0gを添加した揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表3に示す。

【0104】比較例8

◆の基準で官能評価を行なった。その結果を表3に示す。

【0106】

【表1】

実施例 及び 比較例	経 過 時 間	実施例	比較例
		香気力価	香気力価
1	直 後	3. 5	3. 5
	1週間	3. 5	3. 5
	2週間	3. 5	3. 3
	3週間	3. 5	3. 3
	4週間	3. 5	3. 0
2	直 後	3. 4	3. 4
	1週間	3. 4	3. 4
	2週間	3. 4	3. 4
	3週間	3. 4	3. 1
	4週間	3. 4	2. 8
3	直 後	3. 0	3. 0
	1週間	3. 0	3. 0
	2週間	3. 0	2. 8
	3週間	3. 0	2. 8
	4週間	3. 0	2. 5

【0107】

【表2】

実施例 及び 比較例	経 過 時 間	実施例	比較例
		香 気 力 価	香 気 力 価
4	直 後	3. 0	3. 0
	1週間	3. 0	3. 0
	2週間	3. 0	3. 0
	3週間	3. 0	2. 8
	4週間	3. 0	2. 5
5	直 後	3. 1	3. 1
	1週間	3. 1	3. 1
	2週間	3. 1	2. 9
	3週間	3. 1	2. 7
	4週間	3. 1	2. 4
6	直 後	4. 0	4. 0
	1週間	4. 0	4. 0
	2週間	4. 0	3. 8
	3週間	4. 0	3. 6
	4週間	4. 0	3. 5

【0108】

【表3】

実施例 及び 比較例	経 過 時 間	実施例	比較例
		香気力価	香気力価
7	直 後	2. 5	2. 5
	1週間	2. 5	2. 5
	2週間	2. 5	2. 1
	3週間	2. 5	2. 0
	4週間	2. 5	1. 8
8	直 後	2. 8	2. 8
	1週間	2. 8	2. 8
	2週間	2. 8	2. 5
	3週間	2. 8	2. 4
	4週間	2. 8	2. 2

## 【0109】官能評価

〔方法〕得られた芳香剤を、室温25℃下、約2m<sup>3</sup>の無臭ボックス内におき、香気力価をパネラー6名により評価した。尚、前記表1、表2及び表3中には、上記6名の平均値として示してある。

## 【0110】〔評価基準〕

基 準          香気力価  
5                強い

\* 4              やや強い  
3                どちらでもない  
2                やや弱い  
1                弱い

## 【0111】

【発明の効果】本願発明単品香料により、香料成分は徐々に揮散し、一定の香気力価を長期間持続させることができる。

\* 30